

私にも  
言わせて!  
第102回

培った専門性を生かし、  
行政医師として研鑽する



栃木県保健福祉部感染症対策課  
課長補佐  
中村 剛史

1973年生まれ。1998年自治医科大学卒業。地域医療に従事した後、2010年自治医科大学地域医療学講師、家庭医療専門研修プログラム責任者。2013年博士課程地域医療学専攻修了。2019年4月栃木県に入庁、本庁健康増進課配属。2021年4月より現職。2020年4月国立保健医療科学院保健福祉行政管理分野修了。社会医学系専門医・指導医。

行政医師として入庁する前は、へき地医療や地域医療教育に携わっていました。へき地では健康の地域格差と向き合ってきました。地域医療教育では人と人とのつながりが住民の健康にもたらす現場を目にしました。これからはさらに大きい結び付きの中で、経験を生かしていきたいです。どうかよろしくお願ひします。

はつめい

私は2019年に栃木県に入職し、本庁健康増進課がん・生活習慣病担当から行政医師としてのキャリアを始めました。まだ本庁勤務だけの経験ですが、「地域で活躍する公衆衛生医師に、自分の業務について、将来の展望など自由に語ってもらおう」という本企画趣旨に沿って、これまでの経験を振り返り今後の活動に生かしたいと思っています。

地域医療に従事

1992年春、静岡県内の高校

また、ある夏、学生の地域医療実習に同行しました。目的地である中山間地域の村までは細く曲がりくねった険しい道のりでしたが、目的地に近づくと、十分な広さの歩道や手作りの看板などが整備されていきました。「みんなが少しでも散歩しやすいように」と言っていて、近所の男性が歩道脇の草を刈っていました。診察室で生活習慣病の恐ろしさを伝えるだけでなく、気持ちよく歩きやすい歩道を整備して、散歩を勧める疾病予防の方法もあることを学生と共に再発見しました。

さらに、卒後教育として家庭医療専門研修にも携わりました。家庭医療では、患者の医学生理学的な病態だけでなく、患者がその変化をどのように受け止め対処しようとしているか、さらにどこで誰とどんな価値観の下で暮らしているのかも踏まえて診療方針を決定していくプロセスを大切に考え、実践していきます。加えて、その経験をどのように振り返り、次の経験に生かすかという医学教育のプロセスも経験しました。

地域医療という用語は文脈に

を卒業し、自治医科大学に入学しました。県庁との関わりは、この入学手続きから始まります。自治医科大学では在学中も定期的に出身県との関わりがあります。年一回大学で開催される都道府県主管理長会議に合わせて、県担当者、同郷の学生や卒業生が集まり、懇親を深めます。卒業後は、出身県職員に採用され、県人事に従って地域医療に従事します。この間に、へき地医療支援機構などの県のへき地医療施策に関わることもあり、私は自治医大卒業後の契約期間満了に伴い県職員を退職後もしばらくそのままへき地の病院で

よって多様な意味を持ちます。特定地域の医療、身近な医療、医師確保や医療を構築するためのシステム、総合医の医療、開業医の医療、病院の医療、医療制度や法令など医療全般などの捉え方があり、定義も一般化していません(参考文献)。家庭医療、プライマリ・ケア、総合診療など類縁の領域もあります。地域医療教育や家庭医療専門研修に関わる中で、県の医師確保を担当していた行政医師と直接やりとりすることも増えていきました。

栃木県公衆衛生医師

■がん・生活習慣病対策

2019年、栃木県に入庁しました。栃木県には県型保健所5か所に行政医師6名、本庁に私を含めて行政医師3名が在籍しています。また、保健所設置市である宇都宮市にも、保健所長である行政医師1名が在籍しています。多くの行政医師の先輩たちから指導を受けられる恵まれた環境にあります。健康増進課がん・生活習慣病担当では、がん、歯科保健、脳卒中・心血管疾患、糖尿病・CKD、

勤務し続けました。医療過疎・医師不足の中で、臓器系統の専門家としてだけでなく、その地域での暮らしを踏まえた医療・健康の専門家としての力量を問われ続ける日々でした。

へき地病院で当直をしていたあの明け方、胸部症状を訴える初老の男性が受診しました。その男性は前夜遅くに仕事を終え、やっと取得した休暇を妻とともに保養地で過ごすために、そのまま寝ずに長時間運転して来訪しました。心電図は典型的な急性心筋梗塞パターンで、根本治療のために1時間半ほどのつづら折りの道のりを救急車で転院搬送されることになりました。初期治療で少し症状の和らいだその男性が「こんな所では助かる命も助からないな」とサイレんが鳴り響く救急車内ではそつとつぶやきました。医療従事者の努力ではどうにもならない健

アレルギーの疾病対策を主または副として担当しています。担当としての日常業務を指導してくれたのは頼れるベテラン保健師でした。基本的なことをゼロから教わり、上司、同僚、そして多くの仲間を支えられてなんとか現在に至っています。

■新型コロナウイルス感染症対策

令和2年度には、新型コロナウイルス感染症対策の業務が加わり、県入院調整本部に詰めています。入院を必要とする人に適切な入院先を確保できるよう、日々対応しています。個人的にはそんな「対応」に追われていますが、多くの仲間がそれぞれの役割を果たすことでより大きな「対策」が進んでいくことに、公衆衛生の力を実感しています。

今後の展望

2020年4月、国立保健医療科学院保健福祉行政管理分野の研修を受講しました。例年なら集合研修であるところ、緊急事態宣言下であったため全課程オンライン研修でした。さまざまな工夫で学びの機会を確保していただいた科

康の地域格差があるのだろうか、帰路そんなことを考えていました。

地域医療教育

2010年、自治医科大学地域医療学の教員として採用されました。主に医学部低学年の導入教育や地域医療学関連の講義・実習を受け持ちました。ある年、講義の一コマに認知症サポーター養成講座を組み入れました。地域包括支援センターの協力を得て、近隣の保健福祉関係者にも講師を務めてもらいました。対象は認知症の医学的な教育を受ける前の学生たちです。大学6年間を医学生として過ごしているだけではなく、同時に一人の住民として地域社会の中で暮らしていることを認識してくれることも期待してのことでした。それは将来医師としての赴任先でも同様に地域住民としての役割を意識してくれると信じています。

学院の皆さまに感謝しています。またこうした状況だからこそできた受講生同士の結び付きも強く、研修終了後の今も同期から発信される情報に勇気づけられています。これまで自分の専門性を越えた幅広い課題をさまざまな職種と一緒に解決していくことをそれなりに経験してきたつもりでしたが、公衆衛生医師になった今改めてそのスケールの大きさを実感しています。私自身はまだ行政医師の経験も浅く、保健所勤務の経験もなく、本企画趣旨にあるような「地域で活躍する公衆衛生医師」としては若干の気恥ずかしさを覚えますが、気後れすることなく多くの経験を積んでいきたいです。今後ともどうかよろしくご指導をお願いいたします。

■参考文献

上原里程、森田喜紀、神田健史「地域医療」という用語の多様性、日本医事新報(4619)、861-902(2012)、日本医事新報社